

# アイランダー離島学会機関誌 創刊号



発行：オンラインアイランダー離島学会

令和3年11月

## <目次>

- オンラインアイランダー離島学会の見方（オンラインアイランダー学会宣言にかえて） . . . . . 1 頁
  
- 島の暮らしをエンジョイする人々（愛媛県上島町編）
  - ・ 非日常を体験できる島の生活 . . . . . 3 頁  
（公営塾で活躍する若者にインタビュー）
  
  - ・ 手作り木造ヨットでセーリング体験を演出 . . . . . 8 頁  
（ニュージーランドからの移住者。身近な人からの生き生きレポート）
  
- 特派員による報告
  - ・ 間崎島「もやいショップ」の取り組み . . . . . 12 頁  
（うちの近くのコンビニよりも安い「もやい！」）
  
- 挑戦！離島検定 . . . . . 15 頁

# オンラインアイランダー離島学会の見方 (オンラインアイランダー離島学会設立宣言にかえて)

## (はじめに)

「オンラインアイランダー離島学会」とは何でしょうか？離島を盛り上げるべく、オンラインアイランダーというバーチャル空間において、期間限定で立ち上げた離島振興課が企画した取り組みの総称です。

「学会」と名付けた以上は、少し（？）アカデミズムを意識はしていますが、「まずはやってみよう！」との精神でイベントを行うつもりです。それなりに手応えを感じたら、オンラインアイランダーの期間が終了しても、続けて行きたいなどの野心も隠し持っています！

以下では、ここでは「オンラインアイランダー離島学会」の見方と称して、その狙いを簡単に解説します。

## (機関誌の発行)

学会といえば、機関誌なので、まずは機関誌を発行します。創刊号だけで終わると寂しいので、アイランダーの期間中に複数回の刊行を目指します！ここでは、離島の生活をエンジョイする人や、島に生きる「ひと」や「地域」に焦点を当てた寄稿を掲載する予定です。例えば、創刊号では、ニュージーランド出身の若者が離島に住んで生き生き活動する様や、高齢者が多く買い物に難儀のある島で自治体・住民・地元企業等みんなで協力・工夫して商店を運営（それも安い値段で！）する様等をレポートしています。

また、離島学会のイベントである「離島の子ども達への新たな体験」や、「離島の寄り合い所」等の活動状況なども第2号以降で随時報告していきたいと思えます。

## (離島検定)

離島に馴染みをもって頂き、さらに知識を深めて頂くべく、「離島検定」を作りました。離島に関する知識に触れる機会のある場として、幅広い方々に挑戦頂ける内容となっています。成績優秀者には「離島検定博士」の認定を行いたい！と思えます。正解者の中から抽選で離島の特産品が当たるプレゼント企画もご用意しています。

アクセスポイントは[こちら](#)です。オンラインアイランダーの中にヒントはありますよ！

## (離島の寄り合い所・しまっくんぐ)

関係人口とは、広がりのある概念ですが、一つの有力な定義として「ある特定の地域とある特定の事柄に関して継続的に関わりを持つ者」です。ここでのポイントは「継続的に関わりを持つ者」という点であります。そのためには、離島のことをよく知ってもらって、離島のファンになってもらうことが重要です。このような問題意識を持ちつつ、仕事の面から離島のファンになってもらうべく「離島の寄

り合い所」を企画しました。（アカデミックぽい説明でしょう。えへん！）

具体的には、離島関係者と企業とがお互いの情報やアイデアを共有し合う場を設けました。ここからどのような化学変化が起きるのかまだ見えてはいませんが、おもしろい出会いが生まれ、継続的な関わりを持つ関係人口までに昇華していけば儲けものです！

理想はそのよう感じですが、今回でそこまでいくのは正直難しいミッションであることも認識しています。上手くいった点、改善すべき点などを整理して、アイランダーが終わっても、なんらかの形で関係人口づくりのための施策として繋げていければと考えています。

この関係をもう一歩進めたものが「しまっちゃんぐ」の取組であり、企業と組んで新しい商品開発や新規事業の構築を目指します。実は、しまっちゃんぐの取組自体は、以前から行っているものでして、今年で 7 回目を数えています。過去しまっちゃんぐをきっかけとして商品化や事業化されたものとしては「沖島のやさしいアイス（滋賀県沖島）」「乾燥アカモクの通販化（三重県鳥羽市と京都の企業）」などがあります。

### （子どもたちへの新たな体験）

離島人口を維持する点では学校の存在も軽視できません。離島の学校が廃校になると人口減少が進む傾向があるとのデータもありますが、離島人口が減少していく中で、高等学校を維持していくことは離島にとっても悩みの一つになっています。島内の高等学校に進学したり、島外から島内の高等学校に呼び込むことができればいいのですが、それは、なかなか難しい問題です。

しかし、「オンラインアイランダー離島学会」は、離島の学校生活の中で新たな体験ができ、魅力ある学校づくりができればその解答の一つになるのではないかと考えました。そこで、離島においてネット環境が整えつつある中で、高校生（上島町弓削高校）と大学生（三重大学）をオンラインでつなぐ交流の機会を設けました。弓削高校の生徒さんにとって、大学生（それも県外の！）は身近にいる人ではなく、自分の少し先を歩く先輩の人でもあるので、彼らから新たな刺激を感じてもらえればいいなと思っています。また、三重大学の学生にとっても、離島のおもしろさを知るきっかけになってもらえればいいなと思っています（まさに、これは、先にも述べた関係人口づくりですね。）。

この交流がきっかけとなって、お互いに行き来きする、リアルな交流にも発展していけばいいなと勝手に妄想しています！今回は、たまたま、弓削高校と三重大学の交流ですが、今後、いろいろな高校や大学の交流に発展していけばいいなと考えています。

### （最後に）

ここでは、「オンラインアイランダー離島学会」の見方を解説しましたが、いうまでもありませんが、各離島が主催するオンライン交流、live 発信、島のマルシェ等、楽しい企画はまだあります。それらも含めてオンラインアイランダーを訪れた人に、離島を感じ取り、体験して頂くことができれば、「オンラインアイランダー離島学会」を設立した意義は達成したも同然です！

## 島の暮らしをエンジョイする人々（愛媛県上島町編）

島に移住して、島の暮らしをエンジョイする達人を紹介するコーナー。創刊号では愛媛県上島町編。

### ○ 非日常を体験できる島の生活

愛媛県上島町にある唯一の高校（弓削高校）の魅力化のために町が運営する「ゆめしま未来塾」の講師として活躍する田邊勇人さんにインタビューをしてみました！島の暮らしとはどのようなものなのでしょうか？島での生活を少し覗いてみましょう。

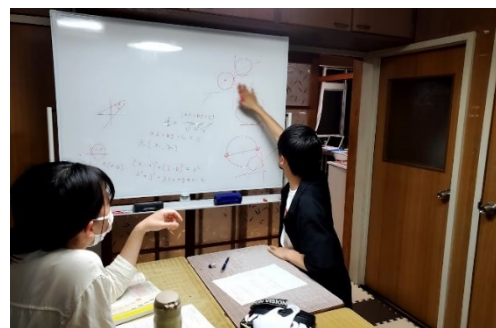
#### Q.どうして上島町に住むようになったのですか？

私は上島町に来る前までは関西に住んでおり、兵庫や大阪で働いていました。満員の通勤電車や人混みが苦手なため、落ち着いた場所に住みたいと思い引っ越ししました。

また、もともと教育の仕事にこれまで7年間くらい関わっており、他人や自分が変化・成長していくことに興味がありました。上島町では「高校魅力化プロジェクト」という教育支援事業に力を入れており、地域全体で教育を盛り上げる仕事が面白そうだったことも、引っ越すことを決めた一因でした。そこでは教科指導に加え、様々な活動を通して生徒たちが学びを得るサポートをしています。



開講の準備中



打合せの様子



講義の様子



講義中の様子（映像機器も使います）

## **Q.教育支援に興味があってこちらに来られたのですね。島で暮らし始めてどのようですか？**

私が住んでいたのはこれまで街か山手の方だったので、海があまり身近ではありませんでした。上島町の海はすごく穏やかで綺麗です。夏の海水浴場は人であふれているイメージがありましたが、ここではほぼ毎日プライベートビーチのような空間が楽しめます。



綺麗な海岸の風景

関西に住んでいた頃は乗る機会が少なく、10回くらいしか乗ったことがなかった船。船は非日常の旅に乗る乗り物で、ちょっとワクワクする乗り物です。ですが上島町では通勤に離島間を移動するため毎日船に乗ります。「船通勤」というワードが使えるのは今住んでいる場所の特権です。



乗船場からの眺め



船上からの眺め

島に暮らし始めて意外だと思ったもう一つの点は、不便が少ないことです。もともとインドアな趣味が多い人間だということもありますが、ケータイの電波も光回線もこれまで住んでいた地域の差は感じる事が少なく、ネットで買い物をして基本的には追加送料なしで商品が届きます。公共交通機関のアクセスも良く、電車や新幹線の駅にも1時間あれば到着します。

強いて言えば、コンビニが23時以降は開いていないこと、少し物価が高いこと、くらいです。あと私自身は現在健康体なので不便には感じていないのですが、町内の医療機関が限られていることは人によっては不便かもしれないです。島内には診療所はありますが、病院となると隣の島である因島まで渡る必要があります。フェリーが運航していない時間帯だと救急艇に来てもらって消防署の方々に病院まで連れていってもらうことになります。

私は以前にニュージーランドの片田舎で 1 年住んでおり、そこも同じような環境だったのを思い出しながら、不便さよりも親しみを感じます。

**Q. 普通の暮らしをしながら非日常を体験できる、島での生活ならではですね。なんだか楽しそう！上島町の人とはどのような方々ですか？**

上島町の人たちはイメージの通り、おおらかで親切な温かい方が多い印象です。たまに野菜が家の前に置いてあったり、すれ違う時に挨拶を交わしたりすることも多いです。都会と違って防犯カメラや監視カメラは見かけることが少ないですが、どこかで何かが起こるとすぐに耳に入ってきます。比較的狭く、横の繋がりが強いので安心して生活出来ています。一方で世間が狭い分、色々な噂話が飛び交うことがあったり、どこかで人間関係が悪くなったら修復が大変だったり、大変な部分もあるようです。

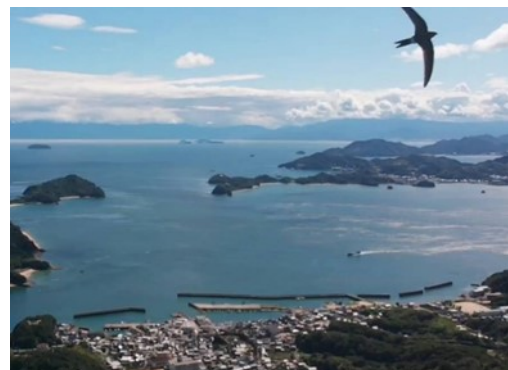
島にもカフェや飲食店を作る人や、サバゲーフィールドを開拓する人、ログハウスを作る人、古民家再生する人、たくさんの外国人 ALT、ファッションブル農家、サステナブルな炭作りをする人、と色々な人がいて意外と刺激が多いです。



静まった夜、語らう人々

**Q 暖かそうな人たちですね。写真を撮るのが好きだとうかがいましたが、いかがですか？**

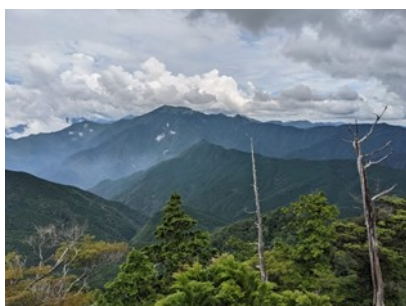
私は写真や動画などが好きなので、休日は海の他にも、山の頂上から町や橋を見下ろして写真を撮ったりします。特に岩城島の積善山という山では 360 度すべての景色が眺められて気持ちいいです。



島々の風景

**Q.きれいな景色ですね！少し話を変えて、島での一日、特に休日はどのように過ごしておられるのですか？**

休みの日は朝起床して少し仕事をして、用事があれば車で今治市や尾道市に買い物や知人の家に遊びに行きます。しまなみ海道の橋を何か所も渡っていくので、晴れている日は運転中も気持ちいいです。今治市にも尾道市にも、車であれば1時間足らずで行くことができます。さらにそこから西条市まで行くと西日本最高峰の石鎚山に行けたり、東温市に行くと白猪の滝や風穴に行けたり、上島町とは少し違った自然の楽しみ方が出来ます。

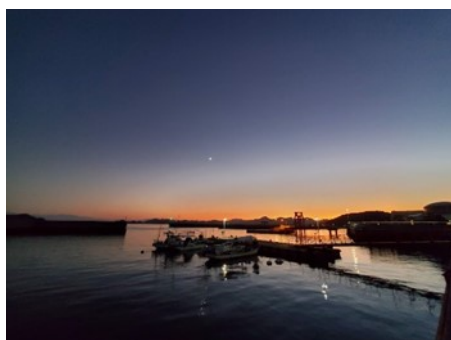


石鎚山



白猪の滝

用事が無い時は島の中で一日中過ごします。景色が反射するくらい穏やかで、稜線と漁船が映る景色が大好きです。



夕暮れ時の港の様子

仕事のある日は、仕事が終わって帰宅した後、すぐに海辺を散歩できるので毎日20分くらい散歩をしています。夜は街頭が少なく星が綺麗に見えますし、外を歩いてもあまり人と会わないので、とてもリラックスできます。海の近くでぼーっとしているとよく魚が跳ねていたり、下に小魚の群れが泳いでいたりします。たまにエイが泳いでいて驚きます。





島から見上げた星空



神秘的な夜の海

**本当にうらやましい限りです！これからも島の生活をエンジョイしながら、お仕事頑張ってください。楽しく貴重なお話、本日はありがとうございました！**

## ○ 手作り木造ヨットでセーリング体験を演出

ニュージーランドから上島町に移住し、自ら製作した手作り木造ヨットでセーリング体験を提供している方をご紹介します。こんどは、少し趣向を変えて、移住定住支援を担当する島おこし協力隊員からのレポートという、第三者からみた生き生きレポート！

《気楽に海で寄り道 のんびり冒険しよう》

——ゆるっとしつつなんだかワクワクさせるキャッチフレーズ。瀬戸内海に浮かぶ離島で構成された町、上島町に「島旅ヨット」という手作り木造カタマランヨット（双胴船）を使ったセーリング体験のできる新しいサービスがあります。（\*島旅ヨット [shimatabiyachts.com](http://shimatabiyachts.com)）

瀬戸内海の新しい遊び方を提案したいと、齋藤サムさん（27）はニュージーランドから上島町へ移住して3年後に島旅ヨットを立ち上げました。ポリネシアの古典的なデザインを取り入れたイギリス人ヨットデザイナーの設計図を元に、弓削島で二艇の船《Asanagi》と《Yūnagi》を建造し、周囲の島々を自由に巡り冒険する新しいアクティビティを提供しています。



上島町でセーリング体験を提供するサムさん

### (1) 移住に至った背景

日本人の母親とイギリス人の父親のあいだに生まれたサムさんは生まれも育ちもニュージーランドですが、現在は第二人を含め家族全員が、上島町の弓削島に住んでいます。

サムさんの家族が弓削島に移住する決め手となった理由の一つが、台風の被害が少ない穏やかな瀬戸内の海とその地形です。というのも、サムさん一家はタイ～東南アジア諸国～奄美大島～弓削島とヨットで航海をしながら移住してきたため、陸上に住んでいても常に船の管理をする必要があります。その点において瀬戸内海の島々は、入り江のような場所がいくつもあり山々に守られた地形は船の碇泊がしやすいのです。なかなか珍しいルートからの移住ではありましたが、道ですれ違いざまに見た目が外国人でも普通に挨拶をしてくれる島の人々や、明るくフレンドリーな島の雰囲気にも安心したことも移住の決め手となりました。

先に弓削島に移住した家族を尋ねて、2018年に初めて弓削島を訪れた、当時ニュージーランドの大学を卒業し働いていたサムさんも、島民の温かさやセーリングにぴったりの海と風景に感動し、島への移住を考え始めました。ここでなら、自分でなにか新しいことを始められそうだと感じました。

## **(2) サムさんの感じた瀬戸内海の魅力**

2018年12月のナショナル・ジオグラフィック・トラベラー英国版や、2019年1月のThe New York Times などの世界の旅行市場に影響を持つ旅行雑誌にて「行くべきデスティネーション」としてランクインした瀬戸内。世界にも類を見ない箱庭的他島美や、年間を通して温暖な気候もその魅力です。日本と同じように島国であるニュージーランドではマリンスポーツが盛んですが、特にヨット文化が充実し多くの人々は幼少期からヨットやボートに馴染みがあり、船や海で過ごすことが日常生活の一部になっています。

そんな海外の文化的背景を持つサムさんにとって、この美しい瀬戸内海にヨットがほとんど浮かんでいないことは驚きでした。江戸時代には風待ち、潮待ちの港町だった瀬戸内海の島々も、今では橋が架かり大きな貨物船やエンジンを積んだ漁船ばかりが海上を行き交う風景が、当たり前となっています。弓削島に移住し働くうちに、やがてサムさんは、地元の人々や特に若い世代の日本人に対して、自分で作った船を使って上島町を中心にヨット文化をもっと普及させたい、と考えるようになりました。サムさんの知っているヨットを使った自然との遊び方を教え、日本でも多くの人がセーリング技術や造船技術などを身につける機会を作りたいと考えました。

## **(3) 移住にあたって～住まいの問題～**

では、実際に移住するとなると、まずは住まいを探さなければなりません。しかし、上島町には不動産会社はありませんし、賃貸アパート等もほとんどありません。家族や知人が町内にいない場合は、町営住宅又は町が運営する空き家情報バンクを利用して住まいを見つけるしかないのが現状です。町営住宅は上島町内のそれぞれの有人島に一地区以上あり、それらのほとんどが平成中期以降に建てられており比較的新しく、間取りも都内のアパート等と比べると十分な広さがあります。但し、町営住宅に入居するには申し込み資格や厳格なルールが設けられているため、誰でも入居できるわけではありません。ペットがいる場合も入居は不可能です。

そこで上島町では、移住定住支援政策の一つとして、空き家情報バンクの運営と改修支援に力を入れています。全国の自治体と同様に、町内で増え続ける空き家を利活用し移住者の新しい住まいとすることで、移住者や町民の住まい確保の問題と空き家問題を同時に解決しようという取り組みです。

しかし、空き家情報バンクに掲載される物件というのは、しばらく住人がいないまま放置されていた家屋が登録されるケースがほとんどのため、即入居可能というよりも、D I Y可能な一部又は大幅な改修を必要とする物件ばかりです。つまり、一般的な不動産サイトと違って、掲載されている

物件に問い合わせても契約や入居までには時間がかかることが多く、引っ越しをする時期は余裕をみて計画する必要があります。

さらに、上島町は「便利な離島」と呼ばれ都市部への移動もしやすく、ネット通販商品も次の日には届くような場所ではありますが、それでも離島は離島、一度は船に乗って海上移動をしないと本州方面へも四国方面へも行くことはできません。ということは、それだけ引越し費用もかかる可能性があります。

最初は両親の家に住まわせてもらっていたサムさんも、徐々に地域に定着してくると自身で町営住宅の部屋を借り、現在は紹介された元空き家に住んでいます。

#### （４）移住にあたって～仕事の問題～

さて、生活をするためには、家の次に大事なのが仕事です。会話はできても日本語の読み書きが苦手だった当時のサムさんにとって、田舎で職を探し雇用されるということは容易ではありませんでした。

ところが、一つの会社に雇われ労働契約時間に沿って働き、決まった収入を得るという大都市オークランドから移り住んだサムさんの考え方は、島で暮らすうちに変わり始めました。地域の様々な職種の人々や先輩移住者に出会い、お金の稼ぎ方に対する概念が変わったのです。

島では若い人は少ないけれど若い人の手が必要な作業は多くあり、個人で何でも屋のような仕事をしている若手の先輩移住者たちがサムさんの目に留まりました。たとえば、若いというだけでも需要があるように、需要があれば価値は創造されると気づいたサムさんは、自分も個人事業主として町内で起業することを決断しました。

バイリンガルであることとニュージーランドで身に着けた船大工のスキルは、都会にいれば人材として市場は広く競争率は高くなりますが、田舎に行けば行くほど唯一無二の存在として価値が上がり、それは自分の強みとなっていきます。2018年当時の上島町に制定されていた上島町定住促進条例を利用し、就業・就職奨励金の支給を受けて、サムさんは船大工として開業することができました。



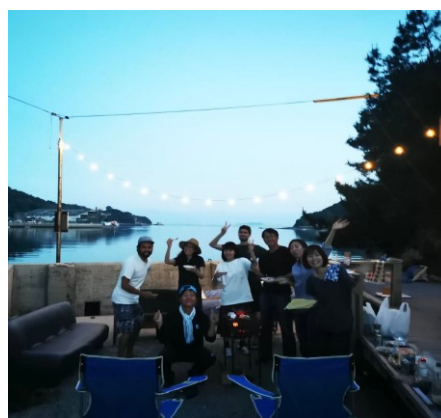
木造ヨットを建造するサムさん

## （５）田舎の小さなコミュニティの良さ

島では、足りない物や足りないことがたくさんあります。島での暮らしは、一人では何もできないことを気づかせます。そんなとき、田舎の小さなコミュニティでは、顔が知られていれば困っていることが伝えやすく広まるのも早いため、自然と助け合いの文化が生まれます。事業を進めるにあたっても事業者が少なく知り合い同士で交渉ができるため、逆に都会よりもハイペースで仕事が進むと、この小さなコミュニティの特徴をサムさんは利点と捉えています。この特徴は政治にも大きく影響します。田舎では、人口が少なく顔見知りが増えるため、一人の声の比重は都会と比べて大きいといえます。地域の出来事や役割が自分たちに直結するため、当事者意識が芽生え政治に参加しやすくなります。つまりそれは、自分の行動の責任感も増すということになります。日本国籍を持つサムさんには選挙権があるので、移住して以来実施された選挙の投票を欠かしたことはありません。自分たちの住む町について真剣に考えられることで、島から日本の政治にしっかり向き合うことができるとサムさんは感じています。

## （６）自分の価値・これからの島ライフ

そのように自分の行動について意識し始めると、移住してからお世話になった町の人々のように自分はここで何ができるだろう、自分がここにいる意味はなんだろう、とサムさんは考えるようになりました。開業して働くうちに気づいたこれまで自分の持っていた技術や才能が、島では重宝され自分の価値が上がるということ。自ずと地域に関わり参加することで、徐々に責任感と自分の存在感を感じられるということ。価値とは環境によって変わるものであり、サムさんは島に暮らすことで自分の存在意義が感じられることを幸せに思っています。島旅ヨットの事業は、サムさんのそんな島での気づきを行動に移した結果の一つであり、これからも二艇の船と共にサムさんの島ライフは続いてゆきます。



友人との楽しい時間

文 = 中山なぎ（上島町島おこし協力隊）

## 特派員からの報告

### ○ 間崎島「もやいショップ」の取り組み（三重県志摩市）

#### —うちの近くのコンビニよりも安い「もやい」！—

「離島には商店がない、物価も高い」とは、よく聞かれる言葉である。しかし、それを地元のみんなで協力して、うまく対応している取組みがあるとの情報を聞きつけ、特派員が三重県を訪れた。その島は、間崎島。三重県志摩市の英虞湾内にある人口約 60 人弱の小さな島であるが、住民や大学、自治体、地元スーパーが協力して、島唯一の商店、「もやいショップ」を運営していた。そこには、「もやいショップ」を支え合う仕組みづくりの中に秘密があった。

#### （1）うちの近くのコンビニよりも安い「もやい」！

もやいショップを訪れると、まずは、店員さんの元気さに驚かされる。店員さんといっても、地元住民のボランティアで、それもかなりの高齢者。シニアのパワーに圧倒されるばかり。

圧倒されるのはそればかりでなく、お値段の安さ。カップヌードル、どん兵衛が 100 円を切る値段、トマトケチャップも 100 円そこそこ。いわしやサンマの缶詰も 100 円から 120 円。この値段なら、自分の家（横浜市）の近くのコンビニよりも安い！

品揃えは約 200 品目。調味料や菓子類、飲食料品や日用雑貨などなど。特別多いわけではないが、これだけあれば、日常の不自由さは感じないレベル。店長さん（ボランティア）に何うと、住民の好みに応じて、品揃えの入替をしているとのこと、おそるべし。

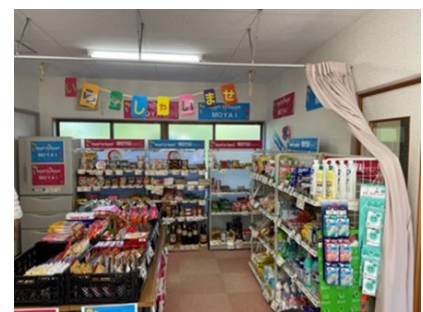
開店は、平日の月・水・金曜日の午前中のみ。お肉や牛乳、ヨーグルト等の生鮮品は事前注文で、金曜日に販売している。開店を絞っているのは、ボランティアに過度な負担がいかないようにするため。これも一つの工夫。

見ていて感心したのは、3 時間弱の開店時間で、混雑する時間帯が無いこと。聞いてみると、住民同士で出かける時間について暗黙の了解があるらしく、混雑しないよう、自主的に決められた順番通りに「もやい」を訪れている。

さらに驚いたのは、便利だからと言ってすべての住民が利用しているのではないことだ。島外に知り合いがいない、身体が動きにくいなど、どうしても「もやい」を利用しないといけない人を優先している



住民ボランティアの皆さん



もやいショップ店内の様子

ことだ。そうすることで、限られた人員で、無理なく回しているようである。

## **(2) プロならではの匠のワザも活用！**

これだけではない。商品の在庫を確認し、補充や入れ替えは、プロである地元のスーパーに一任。注文履歴を参照しながらプロならではの匠のワザで、余分な在庫を出すことなく、求められる商品を確保してもらっている。素人にはできない在庫コスト、商品管理コストの削減を行っている。

(このようなことができるのは、「もやい」の棚で商品（注文制の生鮮食品は除く）を陳列している時点で、スーパーにとって売掛金と見なすような取り決めを行ったから。なんか難しい説明になってしまったが、一言でいうと、「もやい」の店舗に陳列されている商品が、実質的にスーパーの在庫扱いできるようになったのだ。)

また、生鮮食品を注文制にすることで余分な在庫が極力でないようにし、商品の輸送、販売はボランティアが行うことで人件費を抑えている。そんなこんなで、先ほど見たような離島とは思えないような価格を実現しているのだ。

スーパー側にもメリットが生じているようだ。というのも、「もやい」での年間を通じた安定的な売り上げはスーパーにしても大きな魅力となっている。

## **(3) 住民や大学、自治体、地元スーパーが協力して達成！**

ここまで来るのはいろいろ苦労があつたらしい。これに似た「買い物支援」の取組は「もやい」以前にもあつたらしいがなかなかうまく続かなかつたようである。そこで、コーディネーター役として三重大学にお願いするとともに、市、社協、地元スーパー、そしてなによりも島の住民も交えて、買い物支援についての新しい枠組みについて議論・協議を始めた。関係者間の喧々諤々の調整を経て、令和元年7月に「もやい運営協議会」を発足、翌8月には「もやいショップ」の開設にこぎつけたようである。地域を構成するプレイヤーがお互いに議論し、互いに協力することで、はじめて「もやい」が実現できたようである。その際、関係者によると、住民がいかに主体性をもって考えるようになったことが重要とのことである。

「もやい」の活動を始めると、当初の想定しなかつたうれしい誤算もあつた。というのも、「もやい」は、地域の活動や住民の見守りに貢献したからである。「もやい」に立ち寄った機会に家庭菜園や手芸教室のイベントなどを開催したり、いつも来る人が来店しないので心配になって様子を見にいったところ不調を確認し、緊急搬送を行ったりした。

## **(4) まだまだ課題はある。これを克服して、新たな展開へ！**

しかし、全てがすべてうまくいっているわけでない。

持続性という意味では、今後、ボランティアの負担をいかに軽減するかという点である。今でも負担軽減に関して工夫されているが、それだけでは不十分だ。例えば、本土から離島までの船の輸

送をボランティアに任せているが、瀬戸内海で試験運行が実施されている自動運行船が導入できれば、少しでも軽減される可能性はある。また、細かい話ではあるが、ノートとファックスそして目視でやっている発注・検品事務をバーコード処理でできるだけでも軽減になるであろう。

さらに、高齢化しているボランティアをいかに集めるかも今後の重要な課題だ。今の島の住民だけでは物理的に限界があるのが正直なところ。既に島を離れた親族などにも働きかけることが必要になってくるかもしれない。

いずれにせよ、住民、社協や市、スーパー、そして大学が一体となって、離島の課題解決に果敢に取り組んでいる様は心強い限り。このような取組は応援していきたいし、同様な問題を抱えるほかの離島においても十分に参考になるものである。



## ○挑戦！「離島検定」

- ※回答はアイランダーHP内の<[こちらのフォーム](#)>からご回答ください。
- ※問題に関するヒントはアイランダーHP内に散らばっています。よく探してみよう！
- ※成績優秀者には「離島検定博士認定証」を交付！



(問題の一部を掲載！)

1. コンブ漁やウニ漁が盛んな利尻島（北海道）。島の中心にそびえたち、秀峰利尻富士として日本百名山にも選ばれた利尻山の標高は？  
①1,721m、②2,021m、③3,776m
2. 奥尻島（北海道）のシンボルになっている、海に突き出たコの字状の奇岩の名前は？  
①かすがい岩、②なべつる岩、③はりのめ岩
3. 昔から漁が盛んであった田代島（宮城県）では、大漁の守り神として、ある動物をととても大切にし、その動物を祀った神社もあります。その動物は？  
①イヌ、②ネコ、③イルカ
4. 昔ながらの漁村の暮らしが息づき、新しい暮らしを始める人も増えている飛島（山形県）。釣り人向けの提供を目指している、ドローンを使ったプロジェクトの名前は？  
①空飛ぶ天井プロジェクト、②空飛ぶお寿司プロジェクト、③空飛ぶカレープロジェクト
5. 神津島（東京都）の北部にある赤崎遊歩道は全長約 500m の木造遊歩道です。夏になると多くの観光客や島の子どもたちが、あることをして、楽しめます。そのあることとは？  
①飛び込み、②競泳、③水球